

POSEIDON WAR

ポセイドン ウォー
竹島将



POSEIDON WAR

ポセイドン ウォー
竹島 将



ポセイドン ウォー 下

一九八九年 八月二五日 第一刷発行

著 者 竹島 将^{しやう}

発 行 者 若菜 正

発 行 所 株式会社集英社

〒100 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

出版部 (〇三) 二三〇—六一〇〇

電 話 販売部 (〇三) 二三〇—六三九三

製作課 (〇三) 二三〇—六〇八〇

印刷所

中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1989 S. TAKESHIMA, Printed in Japan

ISBN4—08—775131—7 C0093

ポセイドン
ウォー
下

ローレンス・パールは煙草が無性に吸いたかった。

ずいぶん前に煙草は止めた。それ以来こんな思いに駆られたのは初めてだ。

パールは自分の周りに座っている、ワイシャツ姿の男達とブラウス姿の女達を見回した。

タスク・フォースが編成されてから、まだ一週間も経過していない。

八月二十七日。

ジョージ・タウン。

ワシントンD・Cの北西部にあり、ジョージ・タウン大学がある。レンガ敷きの道路。茶色のレンガの壁のクラシカルな建物。

高層ビルなどはまるでなく、夜になればメイン・ストリートであるウイスコンシン・アベニューをカップルや親子連れが歩いていく。ワシントンD・Cの中心街では夜はホワイト・ハウスの周りしか歩けないと言われるほどに治安が悪くなっているのにもかかわらず、この町はワシントンで最もファッショナブルであり、カレッジ・

タウンという呼び名が相応しかった。

ホワイト・ハウスからジョージ・タウンへ伸びるペンシルバニア・アベニューとMストリートのつながる高小い場所にこのビルはあった。

ジョージ・タウンの雰囲気に合わせてのか、茶色の外壁の八階建てのマンション。その最上階の五部屋をぶち抜いて、このオフィスはあった。

部屋は横に並んでおり、両脇の部屋は盗聴防止などの保安システムが組み込まれており、中央の三部屋がオフィスとして作られていた。

パールにはこの部屋をクレインが何のために持っていたのかなど知る由もない。だが、いずれにしろこのようなタスク・フォースを編成する場合は大抵、国防総省の地下二階の十番廊下の最も奥まった『タンク』と呼ばれる盗聴防止装置の完備した会議室、国務省の七階の『作戦センター』、ホワイト・ハウスに隣接する行政府ビル、時には前大統領レーガンやかつてのロックフェラー副大統領も使ったジャクソンプレイス七二六番地のタウン・

ハウスが利用された。ケーシー元CIA長官が就任前に使ったジェファーソン・ホテルもかつては使われたが、半ブロック隔てた場所にソ連大使館があるために、今は使用されていない。

ぶち抜かれた三部屋はいかにもタスク・フォースの使用する場所らしく、中央に大きなテーブルとホワイト・ボードや透明なアクリル・ボードが置かれていた。多数の机の上に載ったコンピュータ。まだ完全に床下に収容しきれていない電話線。乱雑に置かれた幾つもの集中電話装置。山積みされた書類。そして、いつかはこの部屋を埋めてしまいそうなコーヒーの紙コップ。

その室内を見渡せるほぼ中央に透明なシールドに囲まれて、このタスク・フォースの指揮官であるローレンス・パールの部屋があった。

彼の執務机の前に設置された広い会議用テーブルには、例えばDCIアイズ・オンリー（最高機密の中でもさらに機密度の高いことを意味する）のスタンプが押された書類、NSA（国家安全保障局）の使う傍受電文、ブルー・ストライプと呼ばれる青筋の入った、閲覧者が極めて限定されたCIA文書、ブルー・ストライプほどは厳しくないが閲覧者がCIA長官と上級幹部に限定されたNODIS文書等々が、それを作成している各組織の担当者が見たら、卒倒してしまうほど無造作に置かれてい

た。

これらはこのタスク・フォースに参加している約三十人ほどの面々が収集してきたものであり、彼らの優秀さと同時にアメリカ政府内でいかに機密文書の扱いがいか加減かを示すには絶好の光景だった。

情報是非常に細かいものから恐ろしく大局的なものまで及んでいた。

例えば国防長官室へ同じ地域の公衆電話から一日に五回も電話がかかってきたという事実、リカルド・ゴッドウィン調達担当次官が明らかにKGBエージェントと思われる人物と六回に渡って密会している事実、ブレント・スコウクロフト安全保障担当大統領補佐官がかつてのイラン・コントラ・スキヤンダルで作られたような軍人中心の非公式の情報工作チームを作っている可能性があり、依然として軍へ大きな影響力を持っているウィリアム・ハインツ退役空軍中将、アラン・フィッシャー陸軍中佐NSC（国家安全保障会議）軍政部長が中心的な存在として関係しているという事実等々、総ての情報を総合し、分析すると、まさにバーバラ・ミコノフ・リポートが裏付けられた形になっていた。

——クレムリンと米国防総省の一部、ホワイト・ハウスの一部、さらに米タカ派関係者が何らかの共同作戦を展開している可能性——

机の上に組んだ両手の肘をつき、その上に顎をのせて、パールは自分を囲む八人の人間を見た。

彼の前にはここまで集められた情報を分析した報告書が置かれており、それを提出したのはパールを囲む八人だった。

「これが結論なのか？」

疲れているのか、ローレンス・パールのどこか刺々しい言葉が室内に響く。

「はい。その可能性は極めて高いということです」

バーバラ・ミコノフの僅かにかすれた声が、そのあまりにも驚くべき結論にうんざりするほどの現実感を植えつける。

パールの周りにはバーバラ、ハットフィールド、ウィンクラー、ボシュイッツなどの国防総省側の人間とラルフ・クレイン側の人間達アルビン・コナーズ、ポール・セイヤー、ケン・ヘラー、ジェーン・ハマースタインが座っていた。ラルフ・クレインが送り込んできたスタッフの正式なポジションはパール側には教えられていず、パールも含めた国防総省側のメンバーが会ったこともない人間達だった。パール側がこの四人の人間達を調査したが、出てくるものは國務長官特別補佐官という職名と簡単な略歴だけであり、彼らが本当のところ、いかなるキャリアを経験してきたのかは不明だった。言うならば、

ラルフ・クレインの極めて個人的なスタッフということになる。

その上この場にいるこのプロジェクトのリーダー格の人間以外、つまりパールを除いた八人の下につくスタッフは総てラルフ・クレイン側が用意していた。もちろん総て「白い者」とのラルフ・クレイン側の保証付きでだ。

「この報告書には現政権を転覆させるには充分すぎる材料がある」

エリートであることと、誰に対しても冷やかな態度をとることを象徴するかのような銀縁の眼鏡をかけたアルビン・コナーズがつとめて抑制された口調で答えた。

「まったくその通りですな。一大スキャンダルですよ。」

その上、ウォーターゲートやイラン・コントラ・スキャンダルと違うのは、社会主義へのいかなる緩和策を見せようが依然として我が国の最大のライバルであるソ連と、中核となってそれと対決すべき国防総省が中心になっていることです」

アルビン・コナーズがクレイン側のリーダーであることは、その物静かな態度で判った。彼は癖なのか、話すときに時折右人差し指を立てて、こめかみ、頬、顎のどれかに触れる。

ランディ・ボシュイッツはアルビン・コナーズの銀縁

の眼鏡とその癖が理由もなく気に入らず、いつもうんざりするとぼやいていた。

「しかも、報告書の第二部に書かれていますように、国防総省グループ、これは今回のスキヤンダルのアメリカ側を総称してそう呼ばせていただきますが」

「そうではないだろう」

ボシュイッツが気のせいとか、その驚鼻から一際荒い息を吐いて、言葉を挟んだ。

「アメリカ側は国防総省、ホワイト・ハウス、軍の三者が大きく絡んでいる。決して国防総省だけが」

コナースは銀縁の眼鏡から見下したような視線を放つ。「それは自分達もその同類と思われるからですか？」

ボシュイッツがその言葉にむつとした表情を浮かべ、反論しようとする、ハットフィールドが口を挟んだ。

「いえ、事態を正確にしたいだけです。国防総省側というよりは、やはりアメリカ側ではないですか？」

コナースは見下したような視線の印象を変えずに、ゆつくりと瞬きすると、小さくうなずいた。

「よろしい。確かにそうですね。それでは本題に戻りましょう」

コナースは、顔を傾けると立てた右人差し指で頬骨のあたりに触れながら、続ける。

「ゴルバチョフに反旗を翻す可能性のある勢力、リーダー

格はリガチョフですが、そのリガチョフを筆頭とするKGBグループがアメリカ側と接触しているということです。ゴルバチョフの訪米まで半月ほどになりました。ゴルバチョフが情報通り、ワシントンで極端な通常兵力削減案を発表して、強力な平和攻勢をかけてくれば、彼を失脚させようとする勢力は明らかに世界的な反発を買うでしょうし、同時に彼を失脚させてしまえば国民の凄まじい反発を招く可能性があります。それはすなわち円滑に動きだしている西側との経済関係を反故にする可能性もあるということです。このまま時期を見るなどと悠長なことを言っていれば、反ゴルバチョフ勢力は確実に弱まっています」

ウィンクラークがコナースと同じくらい鼻についた態度を見せて、言葉を挟んだ。

「ゴルバチョフの地盤は西側が思っているように堅固なものではない。たとえば反ゴルバチョフ発言を堂々と口に出しているボリス・エリツィンでさえ、代議員選挙で当選している。ようするに反撃の秒読みはもう始まっている、ソ連側はそれにアメリカ側を絡ませようとしている」

「いや、違うな」

全員の中で最も太めであり、しかしそれが彼に精神的な男としての印象を与えるケン・ヘラーが口を挟んだ。

「もしかすると、アメリカ側がソ連側のその思惑を知り、自ら積極的に関係した可能性も捨てきれないと思いますか」

ウィンクラーはその彼の言葉が氣に障ったのか、憤然とした表情で言った。

「つまり、祖国を危機に陥れるかもしれないこの謀略にアメリカ側が積極的に関係していったということですか？」

「その可能性をここまでの調査で捨てられる確固たる根拠がありますか？」

ウィンクラーが僅かに感情的な反応をしそうになったとき、ハットフィールドは持ち前の強い自制力を示すかのような口調で言葉を取った。

「ありません。ソ連側のこの謀略にアメリカ側がメリットを感じ、関係した可能性は確かにあります」

「そのメリットは何だとお考えですか？」

ラルフ・クレインの派遣してきた人間の中の紅一点、ジェーン・ハマースタインが口を開いた。彼女は年齢はすでに三十歳を越えているのだろうが、顔にそばかすの跡が残り、地味な服を着せて、テキサスの田舎町に立たせてもおかしくないほどに野暮ったさが漂う女性だった。「判りません。この謀略の真の真の意味が判明していないのですから、メリットなど見当もつきません」

「まあ、それも時間の問題で解決できるでしょうな」

このようなデリケートな仕事をするにはあまり相応しくない、豪放な印象を与える男、ポール・セイヤーは言った。彼は自分がかつてスポーツ選手だったことを誇りたいのか、それとも露出狂なのか、心持ちワイシャツの襟元をはだけ、逞しい胸板と濃い胸毛をのぞかせていた。オーデコロンはオールド・スパイスを使っており、パーバラはその臭いをひどく嫌っていた。いずれにしろこのような混成チームにはよくある話だが、両者が打ち解けるまでにはかなりの時間が必要だった。

セイヤーは得意気に続ける。

「一週間でここまで判ったんです。このスタッフならば、謀略の真の意味もそう時間がかからずに」

アルビン・コナーズはその言葉を不用意と取ったのか、眼差しに一際冷たい輝きを灯して、セイヤーを見た。

「確かにこのスタッフならば何が起こっているのかは判ってくるだろう。しかし、問題はその時期だ。ゴルバチョフの訪米がそのデッド・エンドだとするならば、その前に事は起こる。判ったときにはすでに手遅れになっている可能性がある」

「そうでしょうか。最後の切り札は我々がすでに持っていると思いますか」

ポール・セイヤーの言葉は、コナーズの批判にまつた

く挫けていないことを示すためか、勢いづいていた。

「最後の切り札だ？」

コナーズの言葉に刺々しさが走る。

「ええ。つまり、我々が敵さんの謀略に気づくのが遅れ、防ぐタイミングを失っていたとしても、そのときにはこの報告書を全世界に公表すれば、連中は動きがとれなくなりですよ。ここまで判明しているわけですから」

ハットフィールドは穏やかに言う。

「判明しているわけではない。総ての確証が揃っているわけではなく、予測と推測の域を出ていないものも数多くある」

セイヤーはその言葉にむっとしながらも、さらに自分の意見を展開する。

「けれど、いずれにしろこの報告書の公表は謀略をストッパさせるだけの効力を」

「ミスター・ポール・セイヤー」

ローレンス・パールの落ち着き払った声がセイヤーの言葉を遮った。

「こんなことは考えられないだろうか。水中戦車の設計図が国防総省内、それも長官室関係から出てきた。仮にだ。この謀略が極めてドラスティックなものだと想定したらどうなる。例えば核攻撃だ。それをアメリカ政府の一部がバック・アップしていたとしたら？」

「馬鹿な。そんな馬鹿なことが」

「ありえないという確証はあるのかね」

「ソ連の対米核攻撃をバック・アップしている、ですか？ そんなことをすれば、命取りですよ。被害は恐ろしいばかりに甚大になります。そんなことは」

パールは口調をひどく硬質にして、訊ねた。

「確証はあるのかね」

ローレンス・パールの口調の硬質さとそれからかもしれないだされる緊迫感にセイヤーは次に発する言葉を飲み込んだ。

パールは続ける。

「報告書の公表で謀略が露になったときには、核ミサイルは打ち出されていて、防衛術はなかった。ありえない状況ではない。その上、ソ連側の主張に反ゴルバチョフというものがあるならば、その核攻撃の指揮をゴルバチョフがしていたという偽装が行われたらどうなるね」

コナーズはまるでパールの言葉を取るかのように言う。

「核攻撃とまではいかなくとも、テロリストによる攻撃、米艦船や航空機への攻撃、諸外国のアメリカ大使館への攻撃、考えられる想定は数多くある。例えばそれらの背後にソ連の暗躍があまりにもあからさまに見え隠れしていたらどうなる？ アメリカ政府は極めてヒステリックな反応をするだろうし、ゴルバチョフが訪米を強行すれ

ば、混乱は必至だ。反ソデモは巨大な渦となり、その攻撃の主犯が仮に反ゴルバチョフ勢力だと判明すれば、ゴルバチョフの国内地盤の脆さは一気に表面化する。ホワイト・ハウスだけではなく、西側の各政府がゴルバチョフ支持を控えるかもしれない」

ダニエル・ハットフィールドがお気に入りの鑑甲縁の眼鏡を外して、シルクのハンカチでレンズを拭きながら言った。

「西側全体がゴルバチョフを信頼し始めている状況であるがゆえに、たとえそれがクレムリン指導部内の反ゴルバチョフ派の犯行だと明らかになったとしても、アフガニスタン侵攻や古くはキューバ危機ほどではないにしろ、親ゴルバチョフの国際世論に水がぶっかけられる」

ハットフィールドにしては珍しく、『ぶっかけられる』という粗野な言葉を使った。もちろん、意図的に使い、強調したのだ。自分がこの事態を正確に把握していることを示すために――

「そして、米ソは冷戦状態に逆戻りする」

ハットフィールドは眼鏡をかけて、ポール・セイヤーを見た。感情を浮かべていないその視線にセイヤーは嫌悪感を覚えた。

ハットフィールドは言った。

「つまり、始めの話に戻るならば報告書を公表しても何

の意味もなく、かといって、何かが起こる前に報告書を公表すれば、逆にゴルバチョフの国内基盤の弱さと我が国側の失態だけがクローズ・アップされる」

「しかし、それで謀略が防げるものならば」

ハットフィールドは視線に見下した感情をたたえ、口を開こうとするが、ジェーン・ハマースタインが言葉を取った。

彼女は事務員が上司に報告するかのように無味乾燥な口調で言った。

「何が起こるのか判らない。もしかするともう起こっているかもしれない。とするならば、報告書の公表はその動きを促進させることになります。言うならば」

ジェーンは持っていたボールペンで、何かの意味があるのだろうか、手近なメモに円を書いた。

「この動きは謀略のような曖昧な言い方で表現されるべきものではなく、不正規作戦行動だと考えるべきでしょう」

ローレンス・パールがテーブルの上で腕を組み、ゆっくりと全員を見回してから言った。

「CIAを絡める必要があるかね」

「ないでしょうな」

アルビン・コナーズは簡潔に言い切った。

「我々の情報ネットワークだけでも十分に調査はできま

すし、ネットワークの中にCIA、NSA、DIAなどの情報は組み込まれています。CIAの本格的な介入を誘えば、白い者だけで行わなければならないこちら側の行動が向こう側に洩れていくことも考えられます。むしろ、完全にこちら側が敵の作戦行動を掌握した段階で、CIAを本格的に関与させるかどうかを考えたらどうでしょうか」

全員に何の異論もなかった。

コナーズはそれを確認した後に続ける。

「では、何をやろうとしているのか？ ジュリエット7に関係している水中戦車が今、こちら側の持っている切り札です」

ハットフィールドが言葉を添える。

「それにポール&マッキンレーを筆頭とする、マリン・ユートピア計画に反旗を翻した始めた会社群。KGBエージェントがイルカとクジラの専門家へ接触したこと。ソ連の新しいクルー・ジング・ミサイルのテスト」

残った未解決の事項をそこまで並べたとき、背後で声が響いた。

「その情報をリークしてきたKGBラインはリガチョフの傘下だ」

全員が振り向いた。

やはり透明なシールドで作られた扉が開き、ラルフ・

クレインが彼の秘書とともに立っていた。

クレインは秘書へ下がっていると顎で示し、扉を閉め、胸ポケットから一枚の書類を取り出すと、ローレンス・パールの座っている所まで歩き、手渡した。

ラルフ・クレインはパールがそれに眼を通して間、彼の背後に立ち、まさに最後に登場した主人公公然として、胸の前で腕を組むと、ゆっくりとしゃべり始めた。

「情報が入った。今、ミスター・ローレンス・パールが眼を通して、NODISの捺印のある書類に記されていることだ。反ゴルバチョフのスターであるリガチョフのラインのKGBエージェントが指揮したカブリロの戦闘で、彼らが何を捜そうとしていたのか？」

クレインは余裕の笑みを浮かべると、その答えを待っている全員の視線を固唾を飲む観客の視線であるかのように受け止めながら、ゆっくりと告げた。

「マイクロフィルムだ」

書類を読み終えたパールは表情をうつすらと強張らせた。それはクレインの言葉を聞いたためではない。書類の内容を知ったためだ。

「CIAはアメリカ国内とヨーロッパ側のKGBへの調査から、KGBはジュリエット7の潜水クルー、つまりティーム・ジュリエットの連中が何かを写したマイクロフィルムを追っていることを察知した。そして、そのマ

イクロフィルムは依然としてKGBにも、もちろんCIAの手にもない。しかもティーム・ジュリエットのメンバーは全員殺されているか行方不明になっているが、彼らの潜んでいた小屋の足跡や指紋を調査した結果、興味深いことが発見された」

「もう一人いた……ですか」

ランディ・ボッシュイッツはそう言って、鼻でふふんと笑った。

ラルフ・クレインは組んでいた腕を解き、スラックスのポケットに両手をつまみ込む。

「日本人のテツロウ・ゴウモト」

今度はバーバラが言う。

クレインは静かにうなずき、唇を僅かに綻ばせた。

コナーズがさらに言葉を加える。

「マリリン・ユートピア計画の実質的なリーダーですか」
クレインは不敵な笑みを浮かべてうつむいたまま、テブルの周りをゆっくりと歩き始め、同じようにゆっくりと話し始める。

「そうだ。KGBが特殊部隊を投入してまで奪取しようとしたのは、そのイクロフィルムだ。そして、ティーム・ジュリエットの生身の脳髓に残った映像だ。彼らにとっては幸運にも生身の脳髓の映像は消去できた。しかし、イクロフィルムはどこかに消えた。彼らはまだ、

おそらくその日本人の存在には気づいていない。気づいていれば、即座に消される」

クレインはそこで立ち止まった。

テブルを挟んで、パールと対峙する場所だ。

「君達の作成した報告書はこれから読むが、いずれにしろ」

ローレンス・パールはその言葉を嘘だと踏んだ。おそらく彼は部下を通じて報告書の概要を知っているのだ。でなければ彼が今、口に出していることなど言えるわけはない。

要するに、ラルフ・クレインはこのタスク・フォースを真に率いているのは自分だと強調したいわけだ。なぜならば……」

クレインは続ける。

「ここまでの流れの中で結局解明されていない最大のことは、総ての発端である……」

クレインは、まさにブロードウェイの舞台に立っている役者であるかのように両手を優雅にポケットから出すと、左右に広げた。

パールは演技を見つめる観客であるかのように、ゆったりと椅子の背に体をあずけ、足を組んだ。

クレインは静かに告げた。

「ジュリエット7だ」

パールはクレインを見つめながら、続けて思い浮かべる。

「なぜならば、このタスク・フォースが発見していくあらゆる材料が、彼の野心達成への武器になるのだから……言わば大統領就任への武器に」

クレインは続ける。

「ジュリエット7で何が起こったのか。そいつを探るべきだろう。もちろん、黒い者の存在の確認は続けなければならぬ。加えて、ジュリエット7の秘密、つまりマイクロフィルムを手に入れる」

クレインは小さく肩をすくめて、室内を見回した。

「その日本人、テツロウ・ゴウモトと早急なるコンタクトをとる必要があるな。だが、彼がマイクロフィルムを持つていない可能性もある。もしそうなら、誰が持っているのか？ それを探るべきだろう。総ての鍵は」

ラルフ・クレインは、選挙の際に最も重要な彼の政治的なトレッド・マーク、たえず積極的なラルフ・クレインの姿を押し出すかのように、ジェーンとケンの間に割り込み、テーブルの端に両手をつき、体を乗り出した。

「諸君、あの総ての発端である沈没船にあるのだよ」

ラルフ・クレインはローレンス・パールへ視線を向けた。その視線は、パールがすでに日本で郷本と会ったのを知っていることを意味するのか、それとも単にこの会

議を締めくくれているのかは判断できなかったが、パールはこれ以上ラルフ・クレインの演技を見ている気になれなかった。

「その日本人、テツロウ・ゴウモトに関しては以前、私の方で調査をしたことがある。彼については私の方にまかせてもらおう」

ラルフ・クレインは自分の思惑通り、事が進んだことに密やかな笑みを浮かべ、ローレンス・パールは視界の片隅でそれを見取っていた。

パールは紙コップの底に残っていたコーヒーを飲み干した。

冷めていたコーヒーは苦々しきだけを喉に残す。

「順調に進んでいるようだな」

会議テーブルの椅子に座り、スーツ姿のままのクレインが報告書に眼を通しながら、言った。

「まあまあというところですか。あとは長官のおっしゃる通り、ジュリエット7で何が起こったのかでしょう。ソ連とアメリカ側が何を企んでいるのかが判れば」

クレインは野心に溢れた輝きを瞳に浮かべ、報告書を無造作にテーブルの中央に放り投げた。

「ゴルバチョフの訪米が早まりそうな雰囲気がある。どういうことか判るかね」

「ゴルバチョフもKGB内部の策謀に気づき始めたが、確固たる証拠を掴んでいない。その一派を押し潰すために、早めに訪米して、衝撃的なプランを発表する」

「まったくその通りだよ」

クレインは両手を頭の後ろで組んだ。

もうスタッフは部屋から出て、仕事に取りかかっている。室内にはパールとクレインだけだ。郷本の所在の確認はランディ・ボッシュイツとハワード・ウィンクラーが行っている。

「ゴルバチョフは焦っているのかもしれない。やはり何かに気づいてはいるんだろう。だから、彼はソ連国内にいるときでもモスクワから離れようとしないうし、夏には必ず出かける黒海の、ソ連国民が見たら眼を丸くしてしまふほどに豪壮な別荘へも行っていない」

スーツ姿のクレインとは対照的に袖を捲くったワイシャツ姿のパールは、クレインの正面に座っている。

「少なくとも先程の推論からすれば、ソ連側のリガチーフ、KGB、軍部タカ派の思惑はゴルバチョフ失脚でしよう。それにはゴルバチョフの行ってきたデータント政策を挫折させることが最適です。つまり、逆の方向へ流れを変えればいい」

「冷戦だな」

「そうですね。ここまでの調査で名前が出ているアメリ

カ側の人間、スコウクロフト、フィッシュャーなどを筆頭とするホワイト・ハウス側、ゴッドウィン、タフトなどの国防総省側、さらにどうやらハイנטツがイニシアチブを取っている軍側の三者はいずれもタカ派です。ロシア人とは握手するのも毛嫌いしている連中です。データントよりも冷戦を歓迎するでしょう」

「イデオロギーとは別に、冷戦になったときに彼らに生ずるメリットを調べてみる必要があるな」

パールとクレインの会話の中で際立って違っていたものはたった一つだ。パールが時折、言葉を止めて、思案しながらしゃべるのに比べ、クレインの言葉は台本でも出来ているかのように滑らかだ。総てが自分のシナリオ通りに進んでいることを見せつけるかのよう——

「軍産複合体の存在ですか」

「冷戦、いや戦争状態から巨大なメリットを得るのはその戦争に投入される武器やそれ以外の物資を供給している会社だ。戦争のイニシアチブを握る政治家や軍部はそこから途方もない利益を得る」

クレインのしゃべっていることは国防総省にいる人間のみならず、政府に関わっている人間ならば誰でもが熟知している論理だった。パールは即座に反応せずクレインがどうしてそんなことを言い出したのかを口にするのを待った。

「つまり、そこで民間会社が絡んでくる」

「マリン・ユートピアを乗っ取るうとしている会社群ですか」

クレインは空になった紙コップを取り上げると、顔の前にかけ、しげしげと見つめた。

「ジュリエット7はマリン・ユートピアから始まった。

あそこで内紛を起こそうとしているポール&マッキンリーの専務は国防長官と親しい」

「ジョン・ニクルズ」

クレインは唇の端を微かにゆがめて、同意を示した。

「作戦が稼動するには資金が必要だ。別にその資金は国防総省からでなくともいいわけだよ。金は金なのだからな」

「ジョン・ニクルズが資金的な黒幕だと考えられているわけですか？」

「そうではない。このような現実において、考えの組み立て方は極めて単純だ。この国は資本主義の国であり、この敵の作戦が稼動していくとどこが利益を得るのか？その利益を得る所が資金を提供する」

クレインはゆっくりと立ち上がった。

「ジョン・ニクルズ関係は私の部下が徹底的に洗っています。今回のアメリカ側グループとのつながりもそう時間がかからずにはつきりするはずですよ」

クレインは手の中で弄んでいた紙コップをテーブルの上に置いた。

「驚いたね。あのミス・ジェーンがこんな赤い口紅を使っているとはね」

確かにクレインの置いた紙コップの縁には、口紅がくつきりと付着している。

「今は彼女も君の部下だ。教えておいた方がいいだろうな。口紅がついたときには、拭き取っておくべきだと。それがマナーだ」

「はい」

クレインは扉の方へ体を翻しながら、まるで独り言のように言った。

「面白いものだね」

「何がですか？」

「ソ連人と握手するのも毛嫌いしている人間達の中には絶対に君もノミネートされるはずなのに、それが今やその人間達を追及する側に回っている」

「ソ連は信用できません。しかし、守るべきものは祖国です」

「なるほど……」

クレインは曖昧にうなずいた。

「長官」

パールはクレインの前へ歩いた。